



『人間の魅力の研究』 伊藤 肇

人間の行動は理屈だけでは割り切れない。ときには善悪の価値判断を超えて物事を受け入れる場合もある。いまふたたびブームになっている元首相・田中角栄がいい例だ。ロッキード事件の被告になっても彼の人気はそれほど衰えなかった。理性と感性を秤にかければ感性に傾くことも少なからずありうるのだ。

ただ歴史は無慈悲に最後の審判をくだす。ヒトラーの運命をみれば明らかだ。本物は残り、偽物は消える。人物論で定評のある伊藤肇は死の直前まで烈しい風雪に耐えうる人間の魅力の考察に精魂を傾けた。

魅力とは各人にそなわった個性であり、抽象的に定義することはきわめて難しい。だが伊藤もいうように一定の原理原則はある。伊藤は品性下劣な人間をもっとも忌み嫌った。たとえば都政を私物化した舛添前東京都知事のような「卑しい人間」は容赦なく切りすてる。

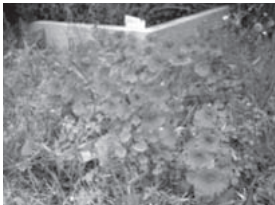
だからこの本にはほんの一握りの人物しか出てこ

ない。土光敏夫もそのひとりだ。土光といえば経団連の元会長であり、いわば資本家の親玉だ。豊臣秀吉のように黄金の茶室を建てることも可能だったかもしれない。ところが彼の暮らしぶりは驚くほど質素だったという。東芝の社長を務めていた岩田武夫は「土光会長の私生活だけは共産党といえども絶対に攻撃することはできない」と断じている。

企業は儲からなければ意味がない。とはいえ儲けるだけでは意味がなさすぎる。思想家の内村鑑三は「高尚なる生涯」こそ「後世への最大遺物」だとして「何人にも遺し得る」と説いている。べつにキリスト教的な聖人君子をめざすことはない。まず卑しさを拒否するところから人間としての魅力が生まれるのだろう。(高倉)

○新潮文庫・定価700円(税込)／いとう・はじめ
1926年愛知県生まれ。中部経済新聞記者などをへて評論家。80年没。著書に『幹部の責任』(徳間文庫)、『現代の帝王学』(講談社文庫)など。

<主要施設>



屋上庭園の特徴を解説版で紹介しています。

中高木から地被類まで、多様な植栽の生育状況の調査や昆虫・鳥類の調査もしています。